

「批評」とは「物事の善し悪しを判断して価値を決めること」とある。そして藝術関連の講演や公演が終わると批評が飛び出す。それは物事を発展させる上で必要なことである。けれど時に「批評」ではなく「批判」と思えるものまで飛び出す。「批判」とは「批評」より否定的要素が大きいものである。私は「批評」とは全体を見渡す心の余裕が残っているものであり、「批判」とは自分の理想が叶えられたか裏切られたかという自己欲求満足度を基準に一気に呵成に語られるものではないかと思う。

私は催しに参加、あるいはそれを鑑賞する場合、当然「楽しみに行く」わけであるが、それでも自分基準の事後感想というものは発生する。時には開演してすぐに否定的場面に出会うこともある。その気持ちはお腹の底からグッと口先まで湧きあがってくる。けれどそこでいったん息を飲む。「全部見てみなければわからないではないか」「もっと深く入らなければ本質までとどり着けないではないか」「私がいるのはまだエントランスだ」その場で吹き上がった批判が頭を占めれば、それは無意識のうちに全体を否定的な方向へ導く。たとえばステージで、出だしと第2部の始まりは声がちがっていることが多い。その一部を全ての批評に結びつけることは全体の構成や印象ではなく、単に個々の技術力の追及に過ぎなくなってしまう。フィギュアスケートの藝術点を省き、技術点だけで採点するようなものである。カラオケで譜面通りの音だけが得点を出すようなものである。果たしてその完璧性は心地良いものであろうか？

そして私は思う。一気に呵成に批判を吐く人は、演者の影の努力と同じことが出来るだろうかと。その人の持てるものと同じレベルの能力が発揮できるのだろうか。自分の中の理想を相手に求めることは、物事の発展のための改善に寄与する一方で、時に発展経路を妨げるかもしれない。「批評」は広義公正な理想であれば発展途上のものに切磋琢磨・試行錯誤の機会を与えるが、批判が求める「完璧」は、きっとこの上なく退屈なものに違いない。そして人間を窮屈にするに違いない。批判者自身も。

私は実はフィーリング型人間である。けれど細部を気にするところもあるので時々完璧主義者に見られる。だが私は「完成」はあっても「完璧」自体存在するとは思っていない。完璧が存在したら文明も藝術もその場で停止する。「停止＝死」である。停止しているものにどんな感想をいだけよう？批評と批判の臨界点はどこにあるのだろうか？それは「お互いが人間である」ところの「流動性を秘めた」理想最高地点にあると思う。この流動性が「時代性」と「社会性」ではないかと思う。

さて、こんなことを書いてみたのは、ひとつには自分の反省もある。私はよく口からポロッと「何で～？」と文句が出る性質である。その時他人に自分と同じ判断基準を求めていることが多い。人は様々である。批判する前に相手の立場に身を置き換えてみよう。もちろん違う人間であるから受け入れられない時もあるけれど、少し考えると自然と一步退くこともある。そのとき私は後退したとは思っていない。むしろ異質の相手を認める精神成長の機会に遭遇したのであって、人間として前進したと感じる。

いずれにしても人により様々な感想がある中で、私はこう思う。一口がぶりとかじった瞬間「まずい」と感じてけなすのが「批判」で、二口目も味わってから「まずい」と判断するのが「批評」ではないか。「批評」は価値判断のための総合的思考であり、「批判」は瞬間的感覚で上辺だけを滑っている拒否反応かもしれない。(2012.11.21)